

タイトル	天に唾する - 排外主義にまつわる国民的自画自賛と健忘症 / 怒りと笑いと憂いのA I狂騒曲
著者	大森, 一輝; OMORI, Kazuteru
引用	年報新入文学(22): 2-9
発行日	2025-12-25

天に唾する

——排外主義にまつわる国民的自画自賛と健忘症／

怒りと笑いと憂いのAI狂騒曲

大森 一輝

かつての日本人

「日本に来る／住む外国人は傍迷惑だ。民度の低い連中、いや、そもそも文化や生活習慣が違う奴らとは、付き合えないし、決してわかり合えない」という類の声ネットが増幅され、リアルな世界にも溢れている。「文化の違う外国人」は、移動先の社会に完全に同化しない限り、受け入れられないし、受け入れるべきではないのだろうか？ 日本人も、当然のことではあるが、日本の外に出れば、「異文化を持ち込む外国人」になる。この理屈で言えば、日本人の海外旅行、ましてや海外移住も、現地社会との間に不可避的に摩擦を引き起こすから制限・拒絶されるべきだ、ということになってしまう。

「日本人だけは特別だ」というのは、剥き出しの自民族優越主義でしかないだろう。いつの間にか、「日本人は、清潔で、礼儀正しく、他人を思いやる」民族だということになってきているようだが、これは、私の個人的な経験・実感とは著しく異なるし、これとは正反対の姿を記録したのも、枚挙に暇がない。

例えば、二〇二五年九月八日にNHKで放送された「映像の世紀バタフライエフェクトシリーズ昭和百年③高度成長やがて悲しき奇跡かな」には、今から見れば目を覆いたくなるような場面がいくつも出てくる。昭和三〇年代の日本人は、平気でどこにでも物を捨てた。道には紙屑が山となり、川は生ごみや排水で悪臭を放っていた。列車の床には空になった駅弁や空き瓶・新聞紙などが放置され、さながら「巨大なゴミ箱のようだった」というナレーションとともに、俄には信じ難い車両内の様子が映し出される。男はどこでもタバコを吸い、どこにでもポイ捨てし、男も女も会社に遅れそうなきには線路の上でもお構いなしに走る。これが、ほんの六〇数年前（私が生まれた頃）の「日本人」の実態である（キャプチャ画像を載せることも考えたが、本誌はオンライン公開しているため、著作権法で認められる「引用」の範囲を超える可能性があり、断念した。興味のある人は、ぜひ番組を見てもらいたい）。こうした人たちが海外旅行をすれば、容易に予想されるように、現地の人たちの鬻ぎを買うことになる。以下は、すべて『読売新聞』からの引用である。「日本人が何気なくすることで現地の人に一番いやがられているのはブラジルでは立ったまま用を足すこと、ハワイでは海水パンツでなく、下着のパンツで泳ぐこと」（一九七〇年八月一日夕刊）。「日本の皆さん、ハワイに観光に来た時には、外で…立小便をしてはいけません。…また食堂のウエートレスのお尻をなでてはいけません」（一九七四年三月一四日投書欄）。他にも、「団体客が列車内で、ブリキカンに火をたき、ラーメンをつくり、女の乗客に抱きつい

た（ドイツ）ことや、バスルームでクズかごを湯オケに使用（ロサンゼルス）したり、人前でバンドをゆるめ、腹巻から財布を出す（パリ）など、マユをひそめることばかり」（一九七〇年八月一三日）。オーストラリアでは、マーケットに「日本の団体さんが来ていて、万年筆何本、香水何十個、時計何個と書いたメモを手に持ち、カウンターに並んでいた。店員が（生活必需品を買いに来た地元の人）のところへ来て、恐れ入りますが、店の閉店までにあなたの順番はこないだろうから、別の店へ行つてくださいと言ったという」（一九七七年三月一八日投書欄）。一九八〇年代に入ってから、パリのホテルのレストランでは、「ツアーの日本人男性が十人程テーブルについていた」が、「突然そのテーブルから演歌が聞こえ始めた。ややしばらくして、手拍子を打ち、次々に大声で歌う。レストランには他の外国人観光客も多数食事をしてしたが、あつげにとられて眺めていた。そのうちに不快感をあらわにし、食事を中断して席を立つ人もいた。」それにもかかわらず、「歌が一段落したと思つたら、ワインの瓶を持ちテーブルをわたり歩き、だれかれの見境もなくワインをついでいる」（一九八一年一月二〇日投書欄）。やりたい放題である。

これらは、一部の不届き者の所業ではない。逆に、報道されたのは氷山の一角である。私と同年代かそれより年長の人たちは、当時の日本人団体海外旅行客がどれだけ世界中で嫌われ蔑まれていたのかを、直接・間接的に知っている（にもかかわらず、知らない／忘れたふりをする人のなんと多いことか）。建物の中や路上で「群がる」のも日本人の悪い癖だった。そのため「ほかの人は通ろうにも通れない」ことに気づかず、気づいても気にしない。「海外旅行でも、日本の大都市でも、ほとんどが未知の人との接触である。それをスムーズにするには、他人に対する思いやりを持つことではなからうか。それがど

うも、日本では戦後、追いつけ、追い越せと、他人のことはそっちのけにして、自分のことだけに専念するようになってしまった。その結果が、海外での日本人の行動になって現れているのである」(一九七三年一〇月七日)。

「確かに、昔は、不潔で、非常識・無神経だったのだろうが、今は違う」と思うかもしれない。日本人は変わったのだ、と。だとしたら、かつて海外に行った日本人が嫌われたのと同じように今の日本で嫌われている外国人も、変わるはずではないか。もうひとつだけ例を挙げる。実は、「爆買い」の元祖も日本人だったのである。一九八〇年代後半、いわゆる「バブル期」の、金回りが良くなった日本人は、次のような買い物をしていた。「ブランド商品を買いきり、まるで獲物でも射止めてきたかのように、大きな買い物袋をいくつも持って町中を集団で歩き回る」(『日本経済新聞』一九八八年九月四日)。「パリのサントレノやロサンゼルスのレストランでは、イナゴのようにブランド商品を食い尽くす日本人団体客に対する、売り子の軽べつに満ちたまなざしを見かけることが多くなった。売り上げに占める日本人のシェアが七割といわれるルイ・ヴィトンでは、日本で普及しすぎてブランド価値が低下しかねない」という問題に直面している」(『朝日新聞』一九八九年二月二〇日)。

現代日本で非難されている外国人の行動は、すべて日本人が先にやってきたことである。この数十年で自分たちはお行儀よくなれたのなら、羽目を外している外国人をもっと温かく見守る余裕を持ってないものだろうか。海外で嫌われていた頃の日本人だって、「あいつらは絶対に変わらない」と思われていたのに、変わったのだから。今の私たちが「人はみんな生まれつき○○で、変わるなどあり得ない」と考え、変わるのは日本人だけで外国人は変わらないと本気で信じるのは、(同じように思われていた)

かつての日本人（と自分との連続性）を全否定する行為としか言いようがない。

もしかして、日本人は、傍若無人・自分勝手な未熟者から、都合の悪い過去をなかつたことにし同じ道を後から辿っている人たちに己の醜さを転嫁して足蹴にする傲慢な卑怯者に「変わった」のだろうか。

これからの学生

※この節は「です、ます」調で書きます。また、個人が特定されないように、事実関係をぼかしたり、一部変更したりしています。

生成AIが学生の行動を変えつつあることを実感させられた最近の事例を二つ紹介します。いずれも、やったこと（いや、やらなかったこと）のツケは、自分に返ってくるという当たり前の話に過ぎないのですが。

授業で見せた映像に対する感想・質問を出させる課題で、映像ではまったく触れられておらず、授業ともほとんど関係のない、第二次世界大戦後のアメリカの農業政策と現代日本のコメ不足のことを書いてきた学生がいたので、直接連絡を取って、どういうことか尋ねたら、作品そのものではなく時代背景を論じたのだ、という返答があり、そうだとしても授業との関連がわからない、と再度説明を求め、同時に、他の授業と取り違えている、あるいはいろいろ調べAIにも相談しているうちに混乱したのであれば、正直にそう言うよう促したところ、黒人への差別を制度化する社会構造という意味で関連がある、

とずいぶん強引なことを言い出したので、具体的にどのような関連があるのか説明してくれなければならぬから、ともう一度突き返したら、農業に関わる制度が弱者に負荷をかけ差別を助長するのだ、というような抽象的なことを言う一方で、いきなり高市政権のコメ政策に言及し始め、全然話が噛み合わないもしかして、と思い、一連のメールのやり取りをAIに読ませて、AIが書いたものかどうかを判定させたら、「ほぼ確実にAIが書いたものです（九五%以上）」という答えが出ました。映像を見ておらず授業内容もわからないので具体的なことは一切書かず（書けず）制度論で押し通し、必然性がないのに突然日本の農政について語り出すのは、抽象論でごまかし余計な知識を詰め込むことで相手を煙に巻くAIの典型的な挙動なのだそうです。AIのインチキをAI自身が指摘するというシニカルな展開になりました。

つまり、この学生は、AIに課題の答えを書かせ、それを疑われるとAIに言い訳メールを書かせた。そしてそれをAIに見抜かれたわけです。

AIの回答の全文（結構長いもの）をそのまま送り、これには反論できないだろう、と思っていたら、反論にならない反論を送り返してきて、AIなど使っていない、と言いつ張り、しかしこれ以上はもう結構です、と逃げようとしたので、それなら口頭試問をします、と呼び出したところ（あまりにも疑わしい場合、本人に釈明を求めることがある旨をあらかじめ通告しています）、応じたので、面談しました。映像の中身や視聴後の私の解説の内容を聞いたところ、授業を欠席し映像も見えていないことは白状しましたが（動画配信サービスでもネットでも見られないものなので、自分で見ることはできないです）、その場になかったので、私が何を言ったのかもわからないから）、この期に及んでも、課題の答えは

自分で調べて考えた、と言うので、課題やメールの中で使われている専門用語について問い質したところ、まったく答えられない。ここでようやく、AIを使った（というか、AIが書いてくれたけれども自分では意味のわからない答えをそのまま提出した）ことを認めました。

もうひとつは、もっと長いレポートにAIを使った事例です。どう考えてもその学生のレベルで書ける文章ではないのに注が全然付いておらず、分析の際の類型化やラベルの付け方がプロっぽくて、ワードの使い方（表の作り方）も一人でやったとは思えないものを送ってきたので、他人の文章の盗用/AIが出力したもののそのままの流用/協力者の存在の隠蔽は、研究倫理に悖る不正行為になりかねないと厳しく言い渡したうえで、面談しました。

パクリかAIか代筆か、と詰め寄ったところ、AIを使ったことは認めましたが、使い方は、文章を論文っぽくしてもらっただけで、アイデアや骨格は自分のものだと言い張る。それならば「表象の進化のイデオロギー的な回収過程」とか「メッセージが市場と受容の回路を通じて循環する仕組み」つて、どういうこと？と問い返すと黙ってしまう。それでも、中身は自分のものだと言って譲らないので、次のような指示を出しました。

自分で意味を説明できない言葉・フレーズ・段落は、すべて削除するか、意味を説明できる表現に書き換えるか、残すのなら意味を説明できるよう勉強してくること。必要のない術学的な英語の略称は、すべて日本語にすること。

つまり、学生らしい稚拙な（元の）文章に戻せ、ということなのです。学術的で滑らかな文章を書くな、という指導をする日が来るとは思いませんでした。しかし、この学生はそれほど優秀ではないので

AIにやらせすぎてバレたものの、適切な（いや、不適切か？）プロンプトを与えれば、今や「大学生らしい文章」をAIに書かせることもできるため、学生が自分では「学ばない」決心をしたら、もうお手上げです。

どちらのときも、私は、最初は腹を立て、途中から学生の愚かさに失笑し、そしてAIの進化（と人間の退化）に驚き、私たちの行く末に不安を感じました。

AIを賢く利用するのは、これからの学生には必要なことですが、AIの出力とは違うことを自分の頭では一切考え（られ）ず、AIの言ったことをそのまま自分の考えであるかのように言うようになる、人間がAIを使っているのか、AIに操られているのかわからなくなります。そして、操られるだけの人間、AIにできることしかできない人間は、もう要らない、ということになりかねない。

AIで時間と労力を節約しているつもりの方は、浮いた時間と労力を何に使うつもりなのでしょう？自分のやりたいことをやるために必要な、生きる力をどうやって養い、その力をどこでどう発揮するつもりなのでしょう？

手を抜けるところは抜いてもいいのかもしれませんが、便利なものはうまく使いこなせばいい。でも、それが自分たちの首を絞める滅びの道にならないよう、人としての生き方を、AI任せではなく人として、一人一人があらためて考えるべきなのだ、強く思います。

（おおもり かずてる・北海学園大学大学院文学研究科教授）